

秋田県に長期滞在しているカササギの記録

船木 信一*

Records of long-term stay of a Magpie *Pica pica sericea* in Akita

Shinichi Funaki

カラス科カササギ属カササギ *Pica pica sericea* (Gould, 1845) (図1) は、アジアからヨーロッパ、北アフリカ、北米などにかけて広く分布するカササギ *Pica pica* の一亜種として扱われているが、『魏志倭人伝』の記録(「その地には牛・馬・虎・豹・羊・鵲なし」)から日本にはもともと生息していなかったと考えられる鳥である。奈良時代以降、大陸との交流が盛んに行われるようになると、カササギは七夕の架け橋を作る伝説の鳥として知られるようになり、『新古今和歌集』、『小倉百人一首』に「鵲の 渡せる橋に おく霜の しろきを見れば 夜ぞ更けにける (大伴家持)」という歌も詠まれるようになる。日本に移りすんだ理由については諸説あり、豊臣秀吉の朝鮮出兵の際に持ち込まれたという説が有名であるが、同じカラス科のミヤマガラスが冬季、朝鮮半島から渡ってくる際に群れの中に混じって観察されることもあることから、自然な分布拡大の可能性があることも否定できないとされる。

日本では有明海周辺の佐賀県(佐賀平野)や福岡県(筑後平野)に局所的に生息していたこともあり、大正12(1923)年に生息地を定めて、国の



図1 カササギ (8/26 男鹿市入道崎)

天然記念物に指定されている。その後、北海道、新潟、長野、東京、兵庫、広島、愛媛、長崎、大分、熊本、対馬で繁殖が記録されており、青森、秋田、岩手、山形、群馬、富山、千葉、福井、愛知、岐阜、石川、滋賀、大阪、島根、山口、香川、宮崎、鹿児島島の各県、島嶼部では山形県飛島、新潟県佐渡と粟島、長崎県男女群島で確認されている。九州の繁殖は分布の拡大に伴うものと思われるが、その他の地域では人為的に持ち込まれたものの可能性が疑われている所もある。このうち、北海道の室蘭から苫小牧一帯に生息している個体群は、平成5(1993)年から繁殖を繰り返しており、完全に地域に定着している(堀本2004)。

秋田では、平成元(1989)年4月に男鹿市門前で確認されたことがあるが、その後、県内で姿を見ることはなかった。筆者は地元住民からの情報に基づき、平成26(2014)年4月から秋田県に初めて長期滞在している個体を継続観察してきた。カササギは外来種であり、また国内で徐々に分布を広げている留意すべき種であると思われるので、記録を報告する。

調査地は、初めて確認された男鹿半島がその中心である。今年度初めて観察されたのは平成26(2014)年4月1日、男鹿市北浦入道崎の島漁港に臨む民家の軒先だった(図2,3)。入道崎島地域で住民に頻繁に見られるようになったのは4月下旬からのことであるが、4月12日には直線距離で約16km南の男鹿市船川港小浜で姿が見られている(図3,4)。上旬から下旬にかけて、男鹿半島の西海岸沿いに生息適地を探しながら往復した可能性が大きい。複数の個体が同時期に男鹿半島にいた可能性も否定できないが、カササギは少数のグループで行動することが多く、複数個体が

*秋田県立博物館



図2 4/1 入道崎で初見のカササギ (鎌田誠喜氏撮影)



図4 4/12 門前で見られた個体 (佐藤福男氏撮影)



図3 調査地 ①入道崎②小浜③仁井田④卸町 (出展：国土地理院ホームページ 観察地を示す表示は筆者による)

いる場合は行動を共にしていると思われることから可能性は低い。また、調査期間中、複数のカササギを同時に見ることはなかった。

4月下旬からは、入道崎島地域を図5に示すよ

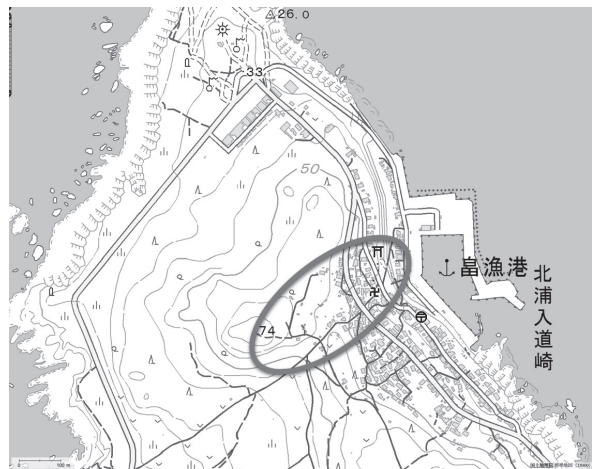


図5 入道崎での行動範囲 (出展：国土地理院ホームページ 行動範囲を示す表示は筆者による)

うな範囲で行動している。範囲は長径約 350 m、短径約 100m という極めて狭い範囲であったため、行動範囲内に住む住民のほとんどがカササギの存在を知っていたのに、少し離れた場所に住む住民は全く知らないという状態だった。存在を知っていた人たちは、早くから見慣れない鳥がいると認識していたが、それがカササギという鳥であるということを知る人はなく、大きな白黒の鳥がいるという程度であった。しかし、その大きさ(体長 40～50cm)と特徴的な体色のおかげで、見間違いの情報はなかった。また、人をあまり怖れることがなく、近くまで寄ることができるということで、親しみを持たれていたらしく、携帯電話で写真を撮るなど、情報の信頼度は高かった。

一日の行動パターンは時期による違いがあるもののかなり規則的で、「毎朝8時には同じ電柱に止まっていた」「10時から12時はあの雑木林の中

にいた」等の情報が寄せられた。

筆者の観察では、一日の多くの時間が、採餌と毛繕いに費やされており、いずれも単独行動だったが、朝はほかのカラス類集団と共に行動していたという情報もあった。

カササギは穀物や木の実、昆虫などを食べる雑食性で、観察している間にカエルの幼体、ジャガイモ、樹洞の中に貯えておいた肉類を食べているのが見られた(図6)。

なお、4月12日の小浜での観察の際は、枝をくわえて飛ぶ行動も観察されている(佐藤私信)。これは営巣のために繁殖期によく見られる行動であるが、今回の調査では巣作りは確認できなかった。

秋田県において、カササギが半年以上滞在した例はなく、他地域の例もあってそのまま定着することも考えられたが、10月3日を境に入道崎地域では姿を見せなくなる。この前に、行動範囲内で電線工事が入ったためか、姿を確認するのが難しくなりつつあったが、これが何らかの影響を与えたのかも知れない。

その後、10月9日に入道崎から約50km南東の秋田市仁井田で観察され、10月13日には撮影もされている(図3, 7)。仁井田に約一週間滞在した後再び姿が見えなくなったが、12月2日に仁井田から約1.5km北西の秋田市卸町で確認された(図3, 8)。移動としては極めて小さいものであり、約2ヵ月に渡って周辺に滞在していたものと思われる。この個体は雪が降ってもなお同地域に留まっているが、さらに餌が少なくなった平成27(2015)年2月下旬においてもなお滞在を続けている。なお、男鹿市で確認された個体と秋田市の個体が同じものであるかは不明である。

さて、この個体がどこから来たものであるかについては推測の域を出ないが、以下のような可能性が考えられる。

- ・朝鮮半島からミヤマガラスの群れに混じって飛来し、そのまま残留した。
- ・北海道で繁殖し、巣立った雛が南下した。
- ・九州近辺で繁殖し、巣立った雛が北上した。
- ・人為的に持ち込まれた。あるいは飼育されていたものが逃げた。



図6 カエルの幼体を食べるカササギ



図7 10/13 秋田市仁井田で撮影されたカササギ
(石田雅士氏撮影)



図8 秋田市卸町に滞在中のカササギ (2/17)

などである。残念ながら、今回の調査ではどれに該当するかを判断できる材料は見つけれなかった。ただ、昨年(2014)からカササギ確認の情報がいくつか寄せられており、県内のカササギ

事情は賑やかになりつつある。今後、繁殖の可能性も視野に入れながら、調査を継続、注視していく必要があると思われる。

末尾ながら、執筆にあたり多大な協力をいただいた鎌田勝悟氏、情報および写真を提供していただいた鎌田誠喜氏、石田雅士氏、佐藤福男氏、佐々木均氏、調査に協力していただいた武藤幹生氏に深く感謝申し上げます。

文献

- 江口和洋・久保浩洋, 1992: 日本産カササギ *Pica pica sericea* の由来 - 史料調査による. 山階鳥研報, 24: 32-39.
- 江口和洋・天野一葉, 1999: 移入鳥類の帰化. 日本鳥学会誌, 47:97-114.
- 堀本富宏, 2004: 北海道胆振地方におけるカササギの記録. 山階鳥学誌, 36:87-90
- 日本鳥学会, 2012: 日本鳥類目録改訂第7版.
- 日本野鳥の会秋田県支部, 2009: 秋田県鳥類目録.